南昌大学医学部訪問記

佐賀大学医学部生体構造機能学講座（神経生理学分野）
平成23年　1月12日　　熊本栄一

（1）はじめに

昨年の10月９日ー11日に中国北京で第7回東西疼痛国際学会が開催され、これに参加しポスター発表を行った。その後、続く12日ー13日に南昌大学医学部（旧称は江西医学院）の第一附属病院を訪問させて頂いた。南昌大学医学部は中国江西省南昌市にあり、佐賀大学医学部とは国際交流協定を結んでいる。北京で学会があることは、現在、南昌大学医学部第一附属病院小児科の柳涛（Tao Liu）講師から情報を得た。柳講師は、国費留学生として来日し、私たちの研究室における研究成果により2年前に学位を取得後、中国へ帰国している。さらに、柳講師と羅時文（Shiwen Luo）教授から学会終了後に第一附属病院を訪問してはどうかという招待を受けた。羅教授は、佐賀医科大学薬理学教室（麻川武雄名誉教授担当）の出身で、学位取得後、香港大学と米国ジョージア医科大学でのポスドクを経て、現在、南昌大学医学部第一附属病院研究部門で教授となっている。学会では、佐賀大学医学部と交流協定を結んでいる中国西安にある第4軍医大学の方々とお会いする機会もあった。国際学術交流という観点から、学会出席と第一附属病院訪問を併せて紹介したい。

（2）学会出席

この学会には、南昌大学医学部からの留学生である岳海源（Hai-Yuan Yue；博士課程4年）君と蒋昌宇（Chung-Yu Jiang；博士課程1年）君、そして、私たちの研究室の藤田亜美准教授や大学院生の井上将成（博士課程３年）君と共に出席した。岳君は「Galanin inhibits dorsal root-evoked monosynaptic glutamatergic excitatory synaptic transmission in adult rat spinal substantia gelationsa neurons」、蒋君は「Comparison between spontaneous excitatory synaptic transmission enhancements produced by resiniferatoxin and capsaicin in adult rat spinal substantia gelatinosa neurons」、そして、柳講師は「Involvement of acetylcholine and norepinephrine in GABAergic inhibitory synaptic transmission enhancement produced by phospholipase A_2 activation in rat

substantia gelatinosa neurons」というタイトルのポスター発表を行った。

このとき、第4軍医大学神経研究所の陳軍（Jun Chen）教授や羅層（Ceng Luo）准教授にお会いした。第4軍医大学には、以前、解剖学教室の増子貞彦教授と村田祐造准教授、そして藤田准教授と一緒に学術国際交流基金を頂いて表敬訪問したことがある。陳教授は、私たちが訪問した当時は解剖学教室におられたが、現在は、その研究所教授と北京の首都医科大学教授を兼任しておられる。羅准教授は、私たちの研究室に約1年間在籍し、短期間だけ助手を務めた後に中国へ帰国した。その後2年間、ドイツのハイデルベルグ大学で研究をし、現在、陳教授とは別の研究室で准教授となっている。羅准教授がハイデルベルク大学留学中、当時、佐賀医科大学の学生であった平地徹君が彼女の研究室を見学したことがある。

また、学会では、第4軍医大学解剖学教室の李雲慶（Yun-Qing Li）教授ともお会いした。李教授には、約10年前に私が吉村恵教授（私たちの研究室の前教授で、現在、九州大学名誉教授兼熊本保健科学大学教授）と共に第4軍医大学を訪問した時にお世話になった。李教授の研究室出身の楊鯤（Kun Yang）君は私たちの研究室で助手を務めた後、現在、米国バルチモアのメリーランド大学の生理学教室で研究を行っている。

昨年、私たちの研究室の多くのメンバーは米国サンディエゴで行われた北米神経科学会に参加発表した。その際、中国から参加した羅教授と楊君と一緒に食事をしながら情報交換を行った。なお、この北米神経科学学会の参加にあたり、水田恒太郎（博士課程3年）君は佐賀大学医学部学術国際交流基金から旅費を補助して頂いた。

（3） 南昌大学第一附属病院訪問

北京での学会終了後、柳講師と蒋君は夜行列車で南昌市へ移動した一方、藤田准教授、岳君、井上君、そして私は飛行機で南昌へ向かった。飛行場では羅教授自ら迎えに来て下さった。南昌へは中塚映政教授（現在、関西医療大学教授で、当時私たちの研究室の准教授）と藤田准教授と私が学術国際交流基金を頂いて平成１７年３月に表敬訪問して以来の2回目の訪問であった。

前回と同様、第一附属病院の近くにある江西賓館に宿泊した。1日目は、まず、市内にある第一附属病院から少し離れた郊外の広い敷地にある新キャンパスに大学の公用車で移動し、羅教授の研究室となる現在改装中の部屋を見せて頂いた。新キャンパスには医学部ばかりでなく南昌大学の他の学部も存在し、さらに、他の大学の広

大なキャンパスも隣接しており、一大学園都市を形成していた。

その後、第一附属病院に移動し、魏云峰院長や泌尿器科学を専門とする王共先副病院長らと、佐賀大学医学部（佐賀医科大学）と南昌大学医学部の間の長きにわたる学術交流について会談した（下の写真参考）。また、疼痛科、麻酔科および神経内科などの教授とも情報交換を行った。

下の写真は副病院長との会談後に一緒に昼食をとった時の集合写真である。左から右の順で、岳君、井上君、羅教授、私、王副病院長、藤田准教授、事務の易応溝さん、同じく事務の李さん、柳講師、蒋君である。李さんには、私たちの滞在中ずっとお世話になった。

午後、羅教授の研究室を訪問した。まず、第一附属病院内にありポスドクが実験を行っている研究室、そして、病院の最上階にあり、これから新たにセットアップする研究室も見学した。新しい研究室には購入したばかりの最新の実験機器が数多く設置されていた。また、スタッフ4名を紹介して頂いたが、いずれも女性であり、その一人は南昌大学医学部における蒋君のクラスメイトということであった。

次に、南昌大学医学部生理学教室教授で岳君の指導教員であった梁(Shang-Dong Liang)教授の研究室も見学させて頂いた。この研究室にも購入したばかりの実験機器が置いてあった。以前、上海にある復旦大学神経生物学研究所を訪問した際にその最新鋭の設備に驚かされたが、中国内陸部の大学にも多額の研究費が投入されつつあるという印象を受けた。

これらの見学の後、佐賀大学医学部(佐賀医科大学)に留学したことある方々と面談する機会があった。佐賀医科大学教養部生物学教室(故伊藤正樹助教授が実験指導)に留学していた姚(Can Yao)さんと黄(Yuan Huang)さん、病理学教室(徳永蔵教授担当)に留学していた王(Liqing Wu)さん、放射線医学教室(工藤祥教授担当)に留学していた金(Qianna Jin)さんが出席した。金さんは昨年まで佐賀にいたので顔なじみであったが、黄さんには久しぶりにお目にかかった。

(上段の左から右の順で、蒋君、姚さん、金さん、柳講師、王さん、黄さん、岳君;下段の左から右の順で、井上君、梁教授、私、藤田准教授、羅教授である。)

その日の夜、皆で一緒に食事をしたのであるが、その面談には出席しなかった楊(Qing Yang)さんが同席した。楊さんは分子生命科学講座(生化学)の出原賢治教授の研究室に留学していた。彼女が中国へ帰国して以来の久しぶりの再会であった。

(左端のウエイトレスから順に右回りで、王さん、楊さん、黄さん、羅教授、梁教授、私、岳君、藤田准教授、井上君、蒋君、金さん、姚さん、大学専属の運転手さん2名;左端の運転手の方には、前回の訪問の時にもお世話になった。)

今回は残念ながら会えなかったが、彼らの他にも江西医学院からの多くの留学生が佐賀医科大学で勉強をしたことがある。私の知っている範囲では、解剖学教室の増子教授の研究室に留学していた段平国(Ping-Guo Duan;現在看護科の河野史教授が実験指導)さん、分子生命科学講座(薬理学)の吉田裕樹教授の研究室に留学していた童(Hong-Lian Tong)さん、そして、私たちの隣の循環生理学の研究室(頴原嗣尚名誉教授担当)に留学していた鄢定紅(D-H Yan)さんがいる。段さんは現在、上海の復旦大学医学部の整形外科学教室の博士課程に進学しているが、研究が忙しく、南昌にいけない旨のメールがあった。童さんは武漢にいて忙しいとのことであった。鄢さんは浙江大学医学部にいる旨の連絡を以前受けたことがあるが、その後、連絡はない。現在、姚さんに佐賀大学医学部(佐賀医科大学)で勉強したことのある江西医学院(南昌大学医学部)からの留学生の名簿作成をお願いしている。

訪問2日目には、王副病院長の挨拶の後、南昌大学医学部の教員や学生に対して、藤田准教授と私が学術講演を行った。私は、岳君が博士論文にする予定の研究内容を紹介した。タイトルは「Regulation by galanin of nociceptive transmission in the spinal

dorsal horn」であり、ガラニンという神経ペプチドが脊髄後角における痛み伝達を制御する仕組みをシナプスレベルで明らかにした研究である。私は英語で講演をし、講演内容を熟知している岳君がスライド1枚ごとに中国語に翻訳した。

一方、藤田准教授は、彼女自身の研究内容を英語で紹介し、講演タイトルは「Proteinase-activated receptor and nociceptive transmission in the spinal dorsal horn」であった。これは脊髄後角のシナプスレベルでトロンビン受容体の活性化が痛み伝達に及ぼす効果を明らかにした研究である。柳講師が中国語への翻訳を行ったのであるが、藤田准教授が最初に中国語で自己紹介をした時には、皆から喝采を浴びた。

講演後、慌ただしく昼食を取った後、羅教授と柳講師に南昌の飛行場まで送って頂いた。その後、北京経由で帰途についた。

（4）おわりに

今回の私たちの南昌大学医学部の訪問をきっかけとして、佐賀で学んだ人々の名簿が作成されれば幸いである。佐賀での勉学が良い思い出であったためであろうか、羅教授からは分子生命科学講座（生体高分子）の高崎洋三教授と社会医学講座の堀田美加子技術職員（以前、薬理学所属）へ、王さんからは徳永教授と病理学の戸田修二教授へのお土産を託された。今後、佐賀大学医学部と南昌大学医学部との交流が益々盛んになることを願っている。

今回の訪問に際して、北京と南昌の間の往復旅費と南昌での滞在費を羅教授と第一附属病院に負担して頂いた。また、南昌訪問中ずっと柳講師が同行し、様々な便宜を図って頂いた。佐賀医科大学（佐賀大学医学部）に留学した方々には、同窓会と称して集まって頂いた。この文面をお借りして、これらの方々、また、第1附属病院の方々にお礼を申し上げたい。